

P2-017

肥満幼児における体重夏増加に関する検討

加藤 則子¹、磯島 豪²、横谷 進³、田中 敏章⁴、
山縣 然太郎⁵、田中 総一郎⁶、呉 繁夫⁶、松原 博子⁷、
石黒 真美⁸、菊谷 昌浩⁸、栗山 進一⁷

¹十文字学園女子大学 幼児教育学科、
²東京大学 医学部 附属病院 小児科、
³国立成育医療研究センター 生体防御系内科、
⁴たなか成長クリニック、
⁵山梨大学 医学部 社会医学講座、
⁶東北大学 医学部 小児科、
⁷東北大学 災害科学国際研究所、
⁸東北大学 メディカル・メガバンク機構

【目的】

小児の発育において、体重が冬に多く増えることが一般的な定説となっている。生活習慣病が問題となっている中で、小学生において肥満のなり始めが夏であることが注目されるようになった。そこで、これまでまだよくわかっていない幼児の肥満の状況と体重及び身長増加の季節性との関連を検討した。

【方法】

東日本大震災に関する小児発達プロジェクト研究で得られたデータを用いた。平成18年4月から平成19年3月までに生まれ1歳から就学前までの6か月ごとの身体計測データの整っている27562例を対象とした。縦断的身体計測は4月と10月に行われ、4月から10月までを夏増加、10月から4月までを冬増加とした。本研究は東北大学の倫理委員会の承認を得ている。

【結果】

2012年10月時点（66～77月齢相当）におけるBMISDSグループ（0.5区切り）別の1歳から6歳までの半月体重増加量の推移をみると、夏増加、冬増加ともに、より大きいBMISDグループにおいて大きい増加量を示した。BMISDスコアが1.0以上1.5未満になると、それ以下の場合の定説どおりの夏増加が少ない傾向が不明瞭になり、1.5以上になると、逆に夏増加のほうが冬増加より相対的に大きくなっていった。各年齢時期におけるBMISDスコアと、その直近1年間における体重夏増加割合を性年齢調整してみると、どの年齢時期においても、BMISDスコアが大きいほど夏増加が大きい傾向にあった。また同じBMISDスコアレベルでも遅い年齢時期ほど夏増加が大きいことが分かった。

【考察】

保育園児においても、近年は肥満につながりやすい夏季のライフスタイルの変化が認められている。また、より高年齢幼児になるとより大きい体重夏増加が観察されやすいことから類推すると、小学生以降になればさらに幼児期よりも肥満児において体重夏増加が大きくなっていることが推測され、それが先行研究の報告につながりやすくなっていたものと想像された。

P2-018

ダウン症候群の乳児と家族を対象とした総合支援外来の家族への効果に関する研究

植田 紀美子、岡本 伸彦

大阪府立母子保健総合医療センター 遺伝診療科

【背景】

当センターでは、年間40人以上のダウン症候群の初診患者があり、特に診断後間もないダウン症候群の子どもと家族を対象とした総合支援外来（すくすく外来）を行っている。すくすく外来は、複数診療科・多職種連携による系統的な情報提供、診断後すぐの支援による親子間愛着形成促進、家族間交流による情報交換・心理的支援等を目標に掲げ、毎月1回、1年間12回を参加の基本とした集団外来である。

【目的】

子どもがダウン症候群と診断された早期の母の心理状況、及びすくすく外来による母の心理状況の変化を明らかにする。

【方法】

2010から2012年度のすくすく外来に参加したダウン症候群の子どもと母81名に対して、親子間愛着感情（MAI-J）や育児負担感（日本版PSI）等について、すくすく外来に初めて参加した時（ベースライン）と12回終了時（介入後）に記名式自記式質問票により調査した。ベースライン調査票は初回以降のすくすく外来で直接回収、介入後調査票は郵送で回収した。ベースラインと介入後のMAI-JやPSIの値はpaired-t検定で比較した。子どもの臨床症状等は診療録から得た。本研究は倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

ベースライン調査60名、介入後調査36名の回答を得た。診断後すぐの健常児母と比べた場合、「子どもが期待どおりにいかない」「子どもに問題を感じる」でストレスが高く、「子どもの機嫌の悪さ」「子どもの気が散りやすい」でストレスが低かった。「退院後の気落ち」でストレスが高く、「社会的孤立」でストレスが低かった。心奇形を合併する子どもの母の方が育児ストレスが有意に低く、母子間愛着感情が有意に強かった。育児ストレスと親子間愛着感情との間に有意に関連性を認めた。すくすく外来に1年間参加後、「子どもが刺激に敏感に反応する」、「抑うつ・罪悪感」、「退院後の気落ち」についてのストレスが有意に改善し、母子間愛着感情が有意に強くなった。

【考察】

ダウン症候群と診断を受け、「子どもに対して問題を感じる」一方で、乳児期の比較的穏やかな特徴を反映して「子どもの機嫌の悪さ」ではストレスが低いと考えられる。診断後早期では、母は気落ちする一方で、周りからの支援が比較的得られると推測できる。対照群を設けない介入前後の比較という調査限界があるが、すくすく外来が育児ストレスの軽減、母子間愛着感情の向上をもたらすことが推測できる。